

10月 神無月(かなづき)

神無月の語源は、神を祭る月であることから「神の月」とする説が有力とされる。

神無月の「無」は「水無月」と同じく、「の」を意味する格助詞「な」である。中世の俗説には、10月に全国の神々が出雲大社に集まり、諸国に神がいなくなることから「神無月」になったとする説があり、出雲国(現在の島根県)では反対に「神有月・神在月(かみありづき)」と呼ばれる。

その他の説では、雷の鳴らない月で「雷無月(かみなしづき)」が転じたとする説や、新穀で酒を醸す月なので「醸成月(かみなしづき)」が転じたとする説がある。

※いよいよ秋。蒸し暑さも去り、過ごしやすいさわやかな気候になって、スポーツや芸術、アウトドアの活動が盛んに行われる月。また様々な実や穀物がみのる時期でもあります。神社で行われる新嘗祭(にいなめさい:収穫に感謝してその年初めて収穫した米を備える祭り)や、各地域で行われる収穫祭など、その年の実りを感謝する行事があちこちで行われます。

10月の行事

10日ごろ	スポーツの日……………2 ページ
31日	ハロウィン……………3 ページ

スポーツの日

スポーツの日は、日本の国民の祝日の一つ。2019年(平成31年・令和元年)までは「体育の日」という名称でした。

1964年(昭和39年)に東京オリンピックの開会式が行われた10月10日を、1966年(昭和41年)に「体育の日」に定め国民の祝日としました。これに伴い、スポーツ振興法で定めたスポーツの日は体育の日に改められました。2000年(平成12年)から、国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律(平成10年法律第141号)によって「ハッピーマンデー制度」が適用され、体育の日は10月の第2月曜日となりました。



体育からスポーツへ

超党派の国会議員でつくるスポーツ議員連盟により、2016年(平成28年)に「体育の日」を「スポーツの日」に変更する検討が始められ、「より広い意味を持ち、自発的に楽しむこと」を目的にしています。

2018年(平成30年)6月13日に改正祝日法が参議院本会議で可決・成立し、2020年(令和2年)1月1日付で「体育の日」は「スポーツの日」へと改められることが決定しました。また、その趣旨も、「スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を培うとともに、健康で活力ある社会の実現を願う」に改められました。

「スポーツの日」は史上初めてカタカナを使った祝日で、英語の名称による祝日となりました。

「体育」を「スポーツ」に改める動きは、スポーツの日に限ったものではなく、2018年(平成30年)4月1日には日本体育協会が日本スポーツ協会に名称を変更しています。また、改正祝日法と同日に可決・成立した改正スポーツ基本法では、「国民体育大会」を2023年から「国民スポーツ大会」に改称することが定められています。

(国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律案 衆議院 2019年10月21日より)

2020オリンピック

2020年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されることに伴い、同年に限り、東京五輪・パラリンピック特措法により、スポーツの日は東京オリンピックの開会式の当初の予定日だった7月24日(金曜日)に変更されました。海の日も同特措法により7月23日(木)に変更されたため、続く土・日を含め4連休となりました。なお、東京オリンピックはその後新型コロナウイルス感染拡大のため翌年に延期されましたが、これによる2020年の祝日の再変更はされずそのまま実施されたため、55年ぶりに10月は祝日がない月となりました。また、2021年は令和三年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会特別措置法により、1年延期された東京オリンピックの開会式の予定日の7月23日(金)にこの年に限り変更されました。海の日も同様に移動されたため、前年に引き続き土曜日・日曜日を含め4連休となりました。

ハロウィン

ハロウィン、あるいはハロウィーン(英: Halloween または Hallowe'en)とは、毎年10月31日に行われる、古代ケルト人が起源と考えられている祭りです。現代では特にアメリカ合衆国で民間行事として定着しています。カボチャをくりぬいて「ジャック・オー・ランタン」を作って飾ったり、子どもたちが魔女やお化けに仮装して近くの家々を訪れてお菓子をもらったりする風習などがあります。(みんなの知恵蔵 2013 版 より)



歴史

古代ケルトのドルイドの信仰では、新年の始まりは冬の季節の始まりである11月1日のサウイン(サオイン、サワーン、サーウインまたは、サウィーン、サーオイン、サムハイン)祭でした。ちょうど短い日が新しい年の始まりを示していたように、日没は新しい日の始まりを意味していました。この収穫祭は毎年現在の暦で言えば10月31日の夜に始まりました。アイルランドと英国のドルイド祭司たちは、かがり火を焚き、作物と動物の犠牲を捧げました。また、ドルイド祭司たちが火のまわりで踊るとともに、太陽の季節が過ぎ去り、暗闇の季節が始まりました。11月1日の朝が来ると、ドルイド祭司は、各家庭にこの火から燃えさしを与え、各家族は、この火を家に持ち帰り、かまどの火を新しくつけて家を暖め、悪いシー(ケルト神話の妖精)などが入らないようにします。1年のこの時期には、この世と霊界との間に目に見えない「門」が開き、この両方の世界の間で自由に行き来が可能となると信じられていたからです。祭典ではかがり火が大きな役割を演じました。村民たちは、牛の骨を炎の上に投げ込み、かがり火が燃え上がると、他のすべての火を消します。その後、各家族は厳粛にこの共通の炎から炉床に火をつけました。

ローマ人は11月1日頃に果実・果樹・果樹園の女神でリンゴをシンボルとしていた女神ポーモーナを讃える祭りを祝っていたと考えられていて、ハロウィンの行事としてダック・アップルが行われるのはその由縁からと考えられ、またハロウィンのシンボルカラーである黒とオレンジのうち、オレンジはポーモーナに由来するとの説があります。

(東洋経済 online 2015, 9, 30 より)

お祭りの様子

ケルト人の1年の終わりは10月31日で、この夜は秋の終わりを意味し、冬の始まりでもあり、死者の霊が家族を訪ねてくると信じられていて、この時期に出てくる悪い精霊や魔女から身を守るために仮面を被り、魔除けの焚き火を焚いていました。これにちなんで31日の夜、カボチャ(アメリカ大陸の発見以前はカブが用いられスコットランドではカブの一種ルタバガを用いる)くりぬいた中に蝋燭を立てて「ジャック・オー・ランタン」を作り、魔女やお化けに仮装した子ども達が近くの家を1軒ずつ訪ねては「トリックかトリートか(Trick or treat. 「お菓子をくれないといたずらするよ」または「いたずらか、お菓子か」)」と唱えます。家庭では、カボチャの菓子を作り、子供たちはもらったお菓子を持ち寄り、ハロウィン・パーティーを開きます。お菓子がもらえなかったらいたずらをしてよいとされています。玄関のライトを点けている、またはハロウィンの飾りつけをしていると訪問してもよいという意思表示になっており、それにもかかわらず断る家主とはいたずらの攻防戦が繰り広げられるそうです。これはあくまでも電気が点いている家に対してであり、そうでない場合はがっかりして立ち去るのだそうです。子ども達に訪問される側の大人たちは、子ども達のためにあらかじめお菓子を大量に用意して待つなど、地域の大人達と子どもたちが交流できる機会になっているそうです。(おくたま経済新聞 2012年10月30日掲載記事より)